

## 小学校 生活科総合的な学習の時間 部会

部会長 赤村立赤小学校 校長 平田 隆司  
実践者 赤村立赤小学校 教諭 有木 温海

### 1 研究主題

主体的・対話的な子どもを育成する生活科の学習  
～ふるさと赤村を教材とした授業づくりを通して～

### 2 主題設定の理由

#### (1) 現代社会の要請から

現代社会は、情報機器や人工知能の急激な発達により情報化が進展し、学びの在り方も大きく変化している。学校教育においては、ICTを効果的に活用しながら、将来にわたって学び続ける基盤を形成し、学びの主体者としての子どもを育成することが求められている。そのためには、与えられた情報を受け取るだけでなく、自ら問いをもち、考え、他者と関わりながら学びを深めていく主体的・対話的な学びを充実させていく必要がある。

生活科は、身近な人・社会・自然との関わりを通して学ぶ教科であり、具体的な体験や活動を基盤として、生活をより豊かにしていくための資質・能力の育成を目指している。学習指導要領では、その資質・能力を「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で示しており、見る・聞く・触るなどの直接体験や、対話を通じた気づきを重視している。このような学習の積み重ねは、子どもが主体的に学びに向かい、他者と関わりながら考えを深める力の基盤となる。しかしながら、実際の授業においては、活動が目的化し、子どもの気づきや思考、対話が十分に生かされない場面も見られる。そこで、本研究では、生活科の特質を生かした学習過程を工夫することにより、子どもが自ら課題に向き合い、対話を通して考えを深める姿を育成したいと考え、本主題を設定した。

#### (2) 児童の実態から

本校の1年生の9割は、村内にある3つの保育園から入学しており、ほとんどの子どもが生まれてから小学校入学まで赤村で育っている。本校で行っている学期末の生活アンケートの項目「あかむらや、あかむらでがんばっているひとのよさについておうちではなしたことがありますか。」の結果では、1学期は、「まったくない」の回答が、27.8%であった。住んでいる身近な赤村のことについて家庭であまり話されていないことが分かり、子どもたちは赤村のよさや魅力を知らずに生活している可能性がある。また、生活科の学習においても、「赤村のよさ」を題材とした学習活動があまり行われておらず、地域のよさや魅力に気付く子どもが少ない。

また、本校では、令和9年度に小中一貫校の開校をひかえており、本年度から学校教育目標に「ふるさと赤村を愛し」という文言が付け加えられた。これは、教

員・保護者が郷土の赤村を愛する子に育って欲しいという思いや願いを持っているということに加え、赤村としても子どもが郷土に誇りを持ちながらたくましく育っていく質の高い教育の実現を願っていることが分かる。

このような実態から、地域を題材にした学習は、子どもの生活経験と結び付きやすく、学習への関心や必然性を高めることができる。また、地域の事象は正解が一つに定まらないため、子どもが自ら問いをもち、考え、他者との対話を通して学びを深める学習につながりやすい。このような特質を生かすことで、主体的・対話的に学ぶ子どもの育成が可能であると考え、本主題を設定した。

### 3 主題の意味

#### (1) 「主体的・対話的な子ども」とは

子どもが自ら興味をもって活動し、友達や地域の人と意見を交換しながら学び、体験と表現を繰り返す中で「もっとこうしたい」という思いや「なぜだろう」という探究心を深め、自分との関わりの中で理解を深める学びができる子である。

#### (2) 「ふるさと赤村を教材とした授業づくり」とは

本研究における「ふるさと赤村を教材にした授業づくり」とは、子どもが日常生活の中で関わっている地域の自然、文化、人、暮らしを学習材として位置付け、実体験を通して学びを構成していく授業づくりを指す。具体的には、地域に実際に出向き、見て・聞いて・触れて確かめる活動を通して子ども自身が課題を見いだし、その課題について考え、表現し、対話を重ねながら理解を深めていく学習過程を重視するものである。

### 4 研究の目標

生活科の学習において、ふるさと赤村を題材にした学習過程における体験活動を通して、主体的・対話的な子どもの育成を図る指導の在り方を究明する。

### 5 研究の仮説

生活科学習において、以下の手立てをとれば、研究の目標を達成できると考える。

#### (1) 学習過程の各段階における目標や目的の明確化

目標や目的を明確にすることで、子どもは「何のために学ぶのか」「今、何を考えればよいのか」を意識しながら活動に取り組むことができるようになる。その結果、見通しをもって主体的に関わろうとする姿が育つと考える

#### (2) 各活動後の振り返りの時間の設定

各活動後に振り返りの時間を設定することで、子どもは自分の気づきや考えを整理し、言語化することができる。また、友だちの考えに触れることで、新たな視点に気づき、対話通して学びを深めることができると考える。

#### (3) 単元のゴールの明確化

単元のゴールを明確にすることで、子どもは学習全体のつながりを理解し、課題解決に向けて主体的・対話的に取り組む姿が育成されると考える。

6 研究の計画（授業の計画）

（１）単元「あきまつりをしよう」

（２）単元の目標及び計画

単元	あきまつりを しよう	総時数	13 時間	時期	10～11 月
単元の目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 秋の自然物を使ったおもちゃ作りを通して、自然物の工夫をすると楽しい遊び道具になることに気づくことができる。（知識及び技能）</li> <li>○ 秋の自然物を生かして、どんな遊びができるか考えたり、試したりすることができる。（思考力・判断力・表現力等）</li> <li>○ 思いや願いをもって遊びや遊び道具作ろうとしている。（学びに向かう力・人間性等）</li> <li>○ 思いやりを持って、居住地校交流の子と仲良く遊ぶことができる。（学びに向かう力・人間性等）</li> </ul>				
次	時	具体的な目標	学習活動・内容	指導上の留意点 (援助・支援)	
一 (つかむ)	1	○ 秋について興味・関心を持ち、活動への見通しをもつことができる。	・「秋だな」と思うことを話し合う。	・写真や動画を見せながら、夏とは違う季節であることを気づかせる。	
	1	○ 秋見つけの計画を立てることができる。	・秋見つけからおもちゃ作りへの見通しを持たせる。	・教科書や昨年度の写真を見せながら、学習の流れを捉えさせる。	
	2	○ 秋見つけをすることができる。	・落ち葉やどんぐりなど「秋だな」と思うものを見つけ、集める。	・学習中、葉っぱの色や木の実が落ちていることを気づかせる。	
二 (活動する)	1	○ 集めた材料から、どんなおもちゃが作れるかを考える。	・どんなおもちゃを作るか話し合う。	・昨年度の写真を見せ、どんなおもちゃが作れるか想起させる。	
	4	○ 自分たちで考えたおもちゃを作ることができる。	・葉っぱや木の実でおもちゃを作る。	・活動後にどこまですすんだのかを振り返らせ、次回の活動に見通しを持たせる。	
	1	○ 作ったおもちゃの遊び方やルールを考えることができる。	・試しに遊びながら、ルールを決める。	・みんながたのしく遊びたくなるようなルールを作るよう促す。	
三 (まと	2	○ みんなで仲良くあきまつりを楽しむことができる。	・居住地校交流の子や友だちとあきまつりを楽しむ。	・安全に注意しながら、活動するように促す。	

1	○ あきまつりをふりかえることができる。	・あきまつりでよかったことやがんばったことをふりかえる。	・あきまつり中の写真を見せ活動中を想起させる。
---	----------------------	------------------------------	-------------------------

## 7 指導の実際

### (1)つかむ

教師の働きかけ	子どもの反応
<p><b>【まちにあきがやってきた】</b></p> <p>○これまでの経験を基に「秋だな」と思うことを話し合わせ、これからの活動に見通しをもたせる。</p> <p>○自然豊かな赤村のよさを取り上げ、どんなところで秋が見つけれられるか考えさせる。</p> <p><b>【目標や目的の明確化】</b></p> <p>○秋見つけで見つけた材料を基に、おもちゃ作りをすることを促す。</p> <p><b>【単元ゴールの明確化】</b></p> <p>○学校の周りがある秋を見つけながら、秋ならではのものがあることに気付かせ、おもちゃ作りのための落ち葉や木の実を拾うことを促す。</p>	<p>・秋といえばどんなことかをふせんに書いて「たべもの」「しぜん」「できごと」で分類した。「たべもの」では、栗やさつまいも、栗ごはんなどが出た。「しぜん」では、どんぐりやおちば、もみじが出た。「できごと」では、お月見やハロウィン、人権集会などが出た。これから秋の学習をするという見通しを持つことができた。</p> <p>・居住地交流の友達が来ることを聞き、仲良く楽しむために、あきまつりを行うことを決めた。あきまつりを成功させるために、落ち葉や木の実を拾っておもちゃを作る気持ちが高まった。招待する友だちを楽しませるために、おもちゃ作りをするという目的意識により、主体的に材量を探ることができた。</p> <p>・日頃から見ている学校の周りの秋を見つけ、道路に落ちている大きな落ち葉やどんぐりなどの木の実を拾って、赤村にも秋がきたということに気が付くことができた。</p> <p>・拾ったどんぐりを見て、「これはこまにぴったりだ」などおもちゃ作りを念頭に置いた発言ができていた。</p>

○目で見ると以外に秋を感じる方法はないかを考えさせた。

- ・途中で目をつぶって、秋の音を聞いた。子どもたちは鳥の音や風の音、風で葉っぱがふれる音などを感じることができた。
- ・活動後は、「どんぐりや落ち葉をたくさん見つけられてよかった」「風の音が気持ちよかった」と振り返りで発言することができた。

**【写真1】落ち葉やどんぐりを拾う子どもたち**

**【写真2】秋の音を聞く子どもたち**



(2) 活動する

教師の働きかけ	子どもの反応
---------	--------

【あきのおもちやができたよ】

○秋見つけで集めた落ち葉やどんぐりから、どんなおもちゃをつくりたいか話し合わせる。

【目標や目的の明確化】

○自分たちで考えたおもちゃを作らせ、その進捗を見取る。

○活動後には、それぞれの班がどこまで進んでいるのかを確認する。【振り返りの時間の設定】

○他のグループの様子に目を向けさせ、新たな気づきを促す。

○あきまつりのために必要なものを考えさせる。

○赤村ならではの自然のものを活用した遊び道具の工夫を考えさせる。

・昨年度の写真や教科書の写真を見ながら、自分たちがどんなおもちゃを作りたいかの見通しを持つことができた。



【写真3】昨年度のあきまつりの写真の一例

・子どもたちが作りたいおもちゃの班に分かれ、教師から作り方を一通り教わり、その後は自分たちで作っていった。

・活動後に、振り返りの時間を取り、「この時間は何をしたのか」「次は何をすべきなのか」をリーダーを中心にそれぞれの班で確認し、全体に報告し、共有した。

・完成後に試しの遊びをして、難しそうであれば、ひもを短くしたり、挑戦する回数を多くしたりするなどのルールを確認していった。

・振り返りをすることで、子どもたちがそれぞれのグループの進み具合を確認でき、昼休みなど子どもたちが時間を見つけて主体的に準備に取り組むことができた。

・あきまつりにむけて、あそびの準備以外にも看板の作成や遊び方の説明の文章を主体的に進めることができた。

・招待する友達に分かりやすく伝えるためにはどんな説明がいいか考えることができた。

(3)まとめる

教師の働きかけ	子どもの反応
<p>【あきまつりをしよう】</p> <p>○みんなで仲良くあきまつりを楽しむことができるように、子どもたちと約束事を設定する。</p> <p>【目標や目的の明確化】</p> <p>○招待した居住校交流の友達と仲良くできるように、はじめの会を設定する</p> <p>○全部のあそびを偏りなくできるように、時間配分を工夫する。</p> <p>○活動しながら、もっと楽しく遊ぶにはどこを工夫したらいいかを考えさせる。</p>	<p>・自分たちのつくった遊び道具(けん玉、ボーリング、どんぐり迷路、どんぐりこま、やじろべえ)で仲良く遊ぶことができた。</p>  <p>【写真4】あきまつりのはじめの会の様子</p> <p>・けん玉はまつぼっくりにひもをつるし、紙コップをつけて作った。係の子どもたちが連続で何回成功したのかを数えたり、成功するためのアドバイスをしたりする姿が見られた。</p>  <p>【写真5】けん玉コーナーの様子</p> <p>・ボーリングでは、ペットボトルに秋見つけて見つけた落ち葉を貼り付け、ボールはペットボトルキャップにどんぐりを入れて作った。ピンを10本用意し、何本倒すかを数える姿が見られた。</p>  <p>【写真6】ボーリングコーナーの様子</p>



【写真7】どんぐり迷路コーナーの様子

○招待した友達が楽しく活動ができているか、話し合わせ、工夫や改善策を考えさせる。

○遊びの中での遊び方の工夫の気付きを他のグループにも共有させる。

○ あきまつり後の振り返りでは、よかったところ中心に振り返り言うように促す。

【振り返りの時間の設定】

・どんぐり迷路では、どんぐりをスタートからゴールまでどんぐりを転がしていく様子が見られた。コースを作る時にゴールとは別の穴をつくるなどの工夫があった。



【写真6】迷路のコースの様子

・それぞれの子どもたちが1コースずつ作ったことで、何度もどんぐり迷路コーナーを訪れる子どもたちがいた。

・やじろべえでは、遊び方がわからない子どもに優しく遊び方を教える姿が見られた。



【写真8】あきまつりのやじろべえコーナーの様子

・どんぐりこま・やじろべえの班は、遊びにくる子が少なかったため、子どもたちが呼び込みをする姿が見られた。

・振り返りでは、「準備が大変だったけど、みんなできてよかった」や「まつぼっくりのけん玉が最初はできなかったけど、お友だちのアドバイスを聞いてできるようになった」など、多くのできたことやあきまつりをしてよかったなどの振り返りを言うことができた。

## 8 研究のまとめ

### (1) 学習過程の各段階における目標や目的の明確化

大きな目標は、あきまつりを完成させることとしたが、単元を通してそれを意識して活動ができた。また、それぞれの段階で目的や目標が明確であった。まず、「つかむ」段階では、身近な季節のことや自分たちが住んでいる赤村の季節の移り変わりを感じるために、秋で思いつくことや、秋見つけを通して、赤村の秋を知ることができた。「活動する」段階では、あきまつりを成功させるために、あきまつりで遊ぶ道具を作ることができた。「まとめる」段階では、それぞれのグループで協力しながら、あきまつりを成功させることができた。

### (2) 各活動後の振り返りの時間の設定

活動後に、振り返りをしたことで、「何をしたのか」「次は何をするのか」を明確にすることができた。特に、秋のおもちゃ道具作りでは、それぞれの班だけでなく、他のグループの振り返りを聞くことで、看板作りなど周りのグループが実践している内容自分のグループに取り入れようとするこゝもあつたため、振り返りの時間は有効であつたと考える。

### (3) 単元のゴールの明確化

単元のゴールである「あきまつりを成功させる」を明確にしたことで、子どもたちが主体的に活動に取り組む姿が見られた。また、活動中にも最終的なゴールを提示することにより、長期間に及ぶ本単元の学習でも、子どもたちが意欲的に取り組むことができた。

## 9 成果と今後の課題

- 目標を子どもたちに示すことで、目標に向かって課題を解決する子どもたちの姿が多く見られ、本単元の中で多くの成長が見られた。
- 秋見つけやおもちゃ作りは、教師主導ではなく、子どもたち中心で行つたため、子どもたち同士でより良いものにするための話し合いも多く行われ、たくさんを表現できたのではないかと考える。
- 学期末の生活アンケートの「あかむらや、あかむらでがんばっているひとのよさについておうちではなしたことがありますか。」2学期は、「まったくない」の回答が、15.0%であり、1学期と比べて減少した。
- 地域の豊かな自然環境を教材として活用したことで、子どもは身近な自然に直接関わりながら学ぶことができ、実感を伴い、それらのよさや素晴らしさに気付くことができた。実際に見て、触れて、感じる体験を通して、児童は多くの気付きや疑問をもち、自ら考えたりする姿が見られた。このことから、赤村の自然環境は、子どもの学習意欲を高め、主体的な学びを促す上で有効な教材であつた。
- 今回は、居住地交流の子が来たため、導入段階であきまつりを開くことを容易に決められたが、今後は村の幼稚園・保育園を招くなど、誰のためにあきまつりを開催するかの目的意識の工夫も必要であると感じた。
- この経験や達成感をこの単元のみにしなないようにするために、3学期の活動に子どもたちが主体となって作り上げる活動を行い、1年生の生活科のまとめとしたい。